

# ジオノ文学における音楽の役割

山 本 省

キーワード：音楽 自然の音 ジャン・ル・ブルー 世界の歌 喜びは永遠に残る

## 序. ジャン・ジオノと音楽

ジオノは音楽が好きだった。彼の作品にはたびたび音楽が登場するので、ジオノが音楽を日常的に愛好していたことは十二分に推測することができる。次女のシルヴィさんやジオノと親しかった友人たちの証言もこのことを裏付けている。かつてジオノ協会を訪問したとき、娘がピアノを練習する音を毎日聞かされるのには耐えられないという理由でピアノを弾かせてもらえなかったとシルヴィさんは苦笑していた。

ジオノが語ることはすべて真実だと鵜呑みにすることはできないが<sup>1</sup>、ジオノにとっては弟子のような存在だったジャン・カリエールとの対話のなかで、モーツァルトはスタンダールとならんでジオノが生涯を通じて好きな芸術家だったということを率直に語っている。まったくの法螺話とも思えないので、まず引用してみよう。

スタンダールの場合と同じで、モーツァルトもまた私の要求したものをいつでも差し出してくれたということです。ときとして、私たちは作家や音楽家に何かを要望するものです。音楽家を聞いたり作家を読んだりしても、彼らは私たちが期待するものは何も提供してくれないこともあります。すでに私たちに何かを提供してくれたことのある音楽家や作家にふたたび何かを期待しても、何も提供してもらえないこともあるのです。[中略]モーツァルトの場合は、私が何かを要求するたびに応えてくれました。スタンダールも、私が何かを要求するたびに、どんな時であろうと、私がどんな年齢であろうとも、スタンダールはつねに応えてくれたものです。<sup>2</sup>

モーツァルトが気に入っていると答えたジオノは、その他の作曲家ではヘンデルがもっとも好きだと付け加えている。「モーツァルトに勝るとも劣らない音楽家、それはヘンデルです。ヘンデルはいつでも私が聞きたいと望んでいるものを聞かせてくれるわけではありません。しかし、ヘンデルが何かを聞かせてくれるときには、力強く聞かせてくれるので、私はとても気に入っているのです。」<sup>3</sup>

ジオノは『屋根の上の軽騎兵』は「オーケストラがおびただしい音を紡ぎだすイタ

リア風の序曲」<sup>4</sup>のような作品であると言っている。つまり、文学を音楽的に構想していたということである。別の対談でジオノは次のように語っている。「当時 [『ジャン・ブルー』執筆当時]、私が書いているときには、モーツァルトやバッハやヘンデルの音楽がきわめて身近に感じられたので、その感動を本のなかに移し入れたいものだと考えていました。」<sup>5</sup> 音楽を聞いて得られる感動を、自分の作品のなかで活かそうとジオノは考えていたのであった。

モーツァルトやヘンデルの音楽を愛好するにとどまることなく、ジオノは自然界に音楽を聞きとる能力に恵まれていた。風の音、揺れる梢の音、川の流れの音、鳥の鳴き声、こうしたものを敏感に聞きとっていたはずである。そしてその経験を自分の作品のなかに投入することができたのであった。

そうした一例を挙げておこう。『憐憫の孤独』のなかの『伐採人の故郷で』において、泉は人々に優しい歌声を聞かせてくれるが、近くに泉がないような場合には糸杉を植えたものだとかつて羊飼いだった男が昔を懐かしんで語る場面である。「空中に糸杉を突き刺し、水の流れを受けとる」という表現はきわめて独創的だと私は評価している。

泉の代用として、みんなは農場のかたわらに糸杉を植えるようになったのです。そうすると、水の泉の代わりに空気の泉ができ、水の泉と同じように人間の仲間になり、同様の喜びを提供してくれるんです。糸杉、それは水の流れを受けとるために湿った斜面に突き刺す小瓶のようなものです。私たちは空中に糸杉を突き刺し、水の流れを受けとるのです。そして、その下に坐り、煙草を吸い、耳を傾けるのです。頭のなかに心配事があるときでも、その音が聞こえてくるのです。ああ！何といい音でしょう。<sup>6</sup>

『屋根の上の軽騎兵』のどのような要素が「イタリア風序曲」なのかということを知り、これを解明するのは筆者の能力を大きく越えているので、私たちはもっと具体的な観点からジオノ作品において音楽が果たしている役割について考えていくことにしよう。

音楽がもっとも重要な意義を担っているのは明らかに『ボミューニュの男』である。これは友情とともに音楽を称揚する記念碑的な物語である。音楽には計り知れない能力が秘められているということが述べられている。音楽から絶大な効果を引き出せるようになったのは、ある村の住民たちが宗教的な理由で全員舌を切り取られ、追放されたという架空の物語設定のおかげである。山のなかの高地に住みついた彼らは、口の奥に残っている短い舌を使って演奏できるハーモニカの技量を磨きあげることにより、言葉による意思疎通と同程度まで、あるいは言葉を凌駕する程度にまで、その音楽の可能性を究めることができたのであった。

アルバンが奏でるハーモニカの雄弁さは次のように描写されている。その音楽の驚くべき可能性を説明しているのは、何としてでもアルバンの力になってやろうと全力を尽くしている、友情に篤いアメデである。

それは活気づき、締めつけ、融けて匂いと音の束になり、そして開花する。犬の吠え声、ばたんと閉まるドア、走る群集、豚、黄色い手を使って泥のなかをよちよちと歩く大きな家鴨。ひとつの村の全体が闇のなかを通過する。桶が床に当たって出す音や、滑車や馬車の音や、誰かを呼んでいる女の声などが聞こえてくる。リンゴのような少女や、両手を腰に当てた女や、金髪の男などが見えてきては、やがて消えていく。

そうしたすべてが、じつに純粹だった！<sup>7</sup>

さまざまな物や情景を喚起しながらも、その音楽は水のように純粹だったとアメデは形容している。この世のものとも思えないような架空の音楽をジオノは創作したのである。「それは純粹で冷涼な水だった。喉がその水を手に入れて飲みこみたいという思いをなくするなどということはなかった。私たちはその音楽のために全身が震えていた。私たちは花のなかにいると同時に自分の内部に花を持っていた。花のなかを動きまわり陶醉している蜜蜂も同然だった。」<sup>8</sup>

『ボミューニュの男』について私は「友情の記念碑」<sup>9</sup>という表題をつけて論じたことがあるが、同じように「音楽の記念碑」という表題のもとでこの物語の魅力を語ることも可能であろう。

以下、この作品ほど音楽の可能性を前面に押し出しているわけではないが、しかし音楽が作品の重要なところで機能している3つの物語（『ジャン・ル・ブルー』、『世界の歌』、『喜びは永遠に残る』）を取りあげて、ジオノ文学における音楽の役割を検討していくことにする。これらはジオノが生涯を過ごした町マノスク、あるいはマノスク周辺を舞台に展開するそれぞれ個性的な物語である。ジオノの戦前の最高傑作と形容できるこの3作品における音楽の役割を検討することにより、ジオノ文学において音楽がいかに重要な役割を果たしているかということが明らかになるであろう。

## 1. 『ジャン・ル・ブルー』における音楽

ジオノのこの自伝的な物語には音楽が満ちあふれている。主人公ジャンは、4階で靴を作っている父親のそばでその仕事ぶりを眺めていることが多い。5つの鳥籠のなかで飼われている小鳥たちがさえずる。小鳥たちに父は蚯蚓や蠅を餌として与える。そうしてジャンと父はロッシニョル（夜鳴き鶯）の囀りに耳を傾けるのであった。

ランプに火をつけ、火加減を調節してから、父はそれらの鳥籠を下ろした。鳥たちがランプの赤茶けた光のなかに入るように父は鳥籠を仕事台のそばに置いた。そうすると、しばらくして鳥たちはすべて囀りはじめるのだった。

私はとりわけアトリとゴシキヒワに聞き入った。ロッシニョルが囀ろうと決心

するには少し暗いところ、水のなかに革を浸している桶のそばに置いてやる必要がある。そうすると、ロッシニョルは小さな嗚咽の轉りからはじめる。

「よく聞くんだ、よく聞くんだよ」と父は言った。

ほかの鳥たちはすべて沈黙し、木製の小さなとまり木にかたまるとまり、毛を逆立てて怖そうにじっとしていた。鳥たちの羽根の透明な縁が震えるのが見えていた。[中略]

「よく聞くんだ。轉りたがっている」

そして、私は、変化が生じているのが分かった。腐った餌の匂いが2つか3つの大きな泡となって立ちのぼってくると、すぐさま鳥の巻き舌の素晴らしい歌が炸裂するのだった。<sup>10</sup>

この他にも、例えば教会の儀式が描写されているところでは、「オルガンは大音響を響かせて」<sup>11</sup>いるし、聖歌隊はオルガンに合わせて歌っている。聖体拝領の儀式がジャンのために行われている最中に、突然「マリアさまは死んじゃった」<sup>12</sup>と叫びながら、狼狽している参列者を尻目に、ジャンは教会から逃げ出してしまう。荘厳な儀式よりも紫陽花や夾竹桃が生い茂っている道の方が好きなジャンは、「夾竹桃の下で4つんばいになって」<sup>13</sup>いる修道女ドロテと合流し、彼女とチョコレートに分けあって味わう。「マリアさまは死んじゃったよ」とジャンが言っても、修道女ドロテはそんなことはとっくに承知しており、平然とした態度を失うことはないのであった。音楽なら何でもいいというのではなくして、自由な雰囲気音楽が好ましいのである。儀式的な音楽からジャンは逃げ出してしまったのであった。

ジャンの家の1階で営業されている洗濯屋では母親の他に3人の娘さんたちが働いている。彼女たちの陽気な様子は次のように描写されている。

私たちの家はすっかり2重構造になっていた。そこには2つの声と2つの顔があった。1階は母のアイロンかけの仕事場だった。白いラシヤの布で覆われた大きなテーブル。母は小鳥のように歌っていた。「サクランボの実る頃」、「金色の小麦」、「苦しみは激しい」、「黒いストッキング」、「フル・フル」。第1のルイーザは3度音程で歌った。アントニーヌは男のように口笛を吹いた。第2のルイーザは頭を揺り動かして拍子をとった。<sup>14</sup>

4階では小鳥たちがさえざり、1階では女たちが愉快地シャンソンを歌っている。歌に満ちあふれた住居だったということがよく分かる。こうした環境で育ったジャンが将来音楽好きになっていくのもごく自然の成り行きである。

やがて、家のなかだけではなく、同じ建物の隣の住まいからも音楽が聞こえてくるようになる。ある日、父が散歩に出かけているあいだ、ジャンは屋根裏部屋の壁ににじみ出ている模様に聖母マリアの姿を認め、そこをじっと見つめていた。壁に現れたマリアの顔の描写が延々と続いてから、ごく自然にそこから湧き出てくるような具

合に音楽が聞こえてくる。

フルートの歌が聞こえてきた。

煉瓦の口が話しているようだった。

それは悲しくも軽快な調べだった。フルート奏者の演奏は有無を言わせぬ正確さだった。この音楽を自分の外に押し出す前に、そのフルート奏者はとぐろを巻いた蛇のようにそれを長いあいだ自分の頭のなかに引きとめていたのだという感じがした。フルートのかたわらでは沈んだ調べをヴァイオリンが奏でていた。それら2つの楽器はともに上昇していく長い道を歩んでいた。非常に遠くまで行く者に特有のゆったりした歩調だった。<sup>15</sup>

散歩から帰ってきていた父もまた、この音楽に聴き惚れた。これを機会に、ジャンの音楽のレッスンはじまる。楽器の演奏を学ぶのではなく、隣りに引っ越してきた2人の音楽家の住まいに行き、彼らが演奏する音楽を聴かせてもらうという独特のレッスンを父親が考え出した。例えば、ロ短調の管弦楽組曲のポロネーズの演奏のレッスンの様子は次のように書かれている。

フルートは飛び出した。そして、蛇が草のなかで立ち上がりその肉体の喜びあるいは怒りでもって自分の欲望の束の間の表情を築き上げるように、フルートは嫌われ者たちの自由な頭のなかに巣くっているこの横柄な幸福の形態を素描した。

たしかに、私がポロネーズを2度目に聞いたときのことを今書いたけれども、ヴァイオリンもフルートもこうしたことをすべて私に告げ知らせたわけではない。私は緑のマリアさまで心を一杯にした少年だった。しかし、それ以来、私はその調べを何千回も何千回も口笛で自分のために吹いてみたが、そのたびごとに、デシデマンとマダム・ラ・レーヌの気難しくて高慢な顔を思い出したものだ。<sup>16</sup>

あるとき、死に瀕している娘のために音楽を演奏してほしいと軽業師が叫ぶというようなことがあった。2人の音楽家は外出していたので、ジャンの出番であった。

「音楽だ、お願いだよ！娘のためなんだ」と軽業師は叫んだ。[中略]

そこで、私はそっと口笛を吹きはじめた。父が私に言った。

「窓にもっと近づくんた」

私はまずバッハの例のポロネーズを吹いた。頭のなかでマリアさまの眼差しと口を思い浮かべるだけでポロネーズはごく自然に唇のところに出てきた。それからハイドンのメヌエットとモーツァルトのメヌエットを吹いた。

唇を嘗めるために中断すると、向こうの男は「もっとだ、もっとだ！」と叫んだ。

パッサカリアの開始部分とスカルラッティの穏やかなうねりを口笛で吹いた。

スカラッティはもう終わりになるということがなく、自分の音楽の短い断片から再生し続けた。

「もういい！」と男は言った。

そして男は窓を閉めた。<sup>17</sup>

息を引き取ろうとしている娘を慰めるために、その父親が窓を開けて隣人たちに音楽を要求したのであった。こうしてジャンは音楽で人を慰めることができる人間に成長していく。『ボミューニュの男』のアルバンのハーモニカの腕前ほどではないにしても、ともかく立派に口笛を吹くことができるようになったのである。これ以降もこの物語に音楽が絶えることはないのだが、私たちは別の物語に移っていくことにしよう。

## 2. 『世界の歌』における自然の音

これは、アントニオとマトウロという2人の人物が、失踪してしまったマトウロの息子を探し出すために、河を遡行し上流の村に辿りつき、さまざまな出来事に遭遇する恋と友情と冒険の物語である。都会から遠く離れたデュランス河流域の住民たちの物語なので、いわゆるクラシック音楽が聞こえてくるようなことはない。しかし、この作品は河や森などの豊かな自然環境から聞こえてくる音楽的な要素に満ちあふれている。そうした自然が奏でる音楽の描写に注目していきたい。

マトウロはアントニオを森のなかの自分の家に案内していく。アントニオは河の中州に住んでいるので、彼らは河の流れの音から遠ざかり、森林に入りこんでいくことになる。アントニオの五感はずっと敏感に森林の音や匂いを感じ取る。

分厚い苔と、足のすぐ下でくだける豊かな腐葉土の上を彼らは歩いていた。森と水の匂いが漂っていた。濃厚で甘い樹液の匂いが時として流れてきたが、アントニオはある時は右側に、また別の時は左側にその匂いを感じていた。その匂いは彼の頭のまわりをゆっくり一周しているようだった。そのすぐあとで、前方に立ちだかる傷ついたトネリコの幹に彼は触れた。緑の葉の匂いと、葉叢の片隅から閃光のように噴出する香りがあった。それは花の匂いのような匂いだった。消えそうになりながらも長い光線を投げかける星のようにきらめいていた。

「何の匂いかな？」アントニオは言った。

「柳だが、勘違いしているんだ。春のような匂いを出してやがる」とマトウロは言った。

檜の林までやってくると、マトウロは立ち止まり、小道についているはずのくぼみを足で探った。

アントニオには森の音が聞こえた。彼らは沈黙に包まれた一角を通りすぎてきたのだった。今では生命感に満ちあふれた森の夜の音が聞こえてきた。その音はまるで冷たい指のような感触で耳に触れてきた。それはかすかで長い微風、峡谷

の音、深遠な音、開いた口から出てくる単調で長い音だった。その音は木々の生えている開けた広い丘のすべてを知りつくしていた。音はまるで雨のように、空の上にも大地の上にもあまねく漂っていた。それは同時にあらゆる方向からやってきた。そして谷間の回廊のなかでごうごうと唸りながら、重い波のようにゆっくり揺れていた。<sup>18</sup>

私たちは音に関わる箇所を探っているのだが、ついでに匂いについて記されている部分も引用してみた。引用文のはじめのところで森林の匂いや春の柳の匂いなどが喚起されている。これ以降は音に焦点を絞っていくことになるが、匂いもまたふんだんに描写されていることを忘れないように、さまざまな匂いの描写が見られるこのあたりの文章からもう一例だけ紹介しておきたい。夜の闇に包まれているので、音と匂いと触覚の世界が広がっているのである。「濃厚な生命の匂いが谷間や丘の上を静かに流れていた。アントニオは自分の方に漂ってくるその匂いを感じた。生命の匂いは彼の両脚を叩き、両脚のあいだや両腕と胸のあいだを通りすぎ、頬に当たり、髪の毛のなかに入ってきた。まるで魚がわんさと集まっている穴のなかにもぐりこんだような気分だった。」<sup>19</sup>

森のなかから聞こえてくる音がいつも心地よいものばかりであるとは限らない。時には不可解で何の音なのか分からないような音もある。樹木のざわめきや風が吹く音に混じって、動物や鳥たちの声、人間がどこかで鳴らしているラッパの音などが聞こえる。そして夜の闇のなかで、草の向こうから呻き声のようなものが流れてくる。

彼らは今、窪地の底にいた。月と霧のぼやけた微光が、上の方の林のなかに残っていた。彼らはびっしり生えている苔の上を歩いていた。大変な仕事をやっているような喘ぎ、足で地面を削る音、素手で石を打つ音、さらにすべてを切り裂く叫び声が、彼らのすぐ近くから聞こえてきた。

それはすぐ近くの茂みのなかだった。

「明かりをつけろ」アントニオは言った。

マトゥロはライターを打った。

女が仰向けに横たわっていた。スカートはすっかり腹の上まで引き上げられており、彼女はその布の塊と腹を両手でもみくちゃにし、身体全体が十字になるように両腕を開き、叫んだ。腰を突き上げた。頭と足だけで地面に接していた。彼女は長い努力をした。腿を開いた。黙って呼吸もせず力いっぱいきんだ。そして叫びながら息をして、苔の上に落ちた。頭は草のなかで右に左にぶち当たっていた。

「女だ！」アントニオは叫んだ。

彼女には聞こえていなかった。

「助けを呼べ、助けを呼ぶんだ」マトゥロは言った。

アントニオはスカートを下ろそうとした。スカートの下の女の腹が、海のようにねる生命を宿しているのが感じられた。<sup>20</sup>

彼らは河の近くの森林のなかでひとりの女が出産しようとしている現場に遭遇したのであった。その女は何とか無事に子どもを出産し、近くの家に保護される。やがて彼女は盲目だということが判明するが、この盲目の女性クララにアントニオはひかれる。自分は必ず戻ってくるので、待っていてほしいとアントニオは彼女に約束させる。闇夜を切り裂くような呻き声をあげていた女が、これ以降アントニオの大切な女性になる。彼女はアントニオの光（クララ [Clara] とは光、明るさ [clarté] などを意味する）になる。彼女には世界の光は見えないが、アントニオを導くのは彼女の光なのである。

アントニオは詩を作りそれを歌うことができる人物であるということが、このあとの牛飼いと会話の場面から明らかになってくる。みんなから〈金の口〉と呼ばれている美声の持ち主なのである。クララに出会ったあと、アントニオは自分には歌う題材がたくさんあることに気付く。「河に生えているの葦の茂みで歌う〈金の口〉に自分が戻っていくのが、アントニオには感じられた。口を水の外に出し、身体は世界 [水] のなかにつかり、洗濯場の近くで係留している男に戻っていくのが。」<sup>21</sup>

クララがアントニオの意識を支配するようになる。「あの星たちは〈目〉と名づけよう。あの星たちは、まだ眠っていて、瞼を開いていない女の視線に似ているからだ。」<sup>22</sup>夜空を見上げ、星たちに名前をつけるアントニオは、『喜びは永遠に残る』のボビときわめて似通った詩人のような男だということが分かる。

生まれた赤ちゃんをあやすクララの穏やかな「子守歌」<sup>23</sup>が聞こえる。まだ曙光が現れる前の寒い森のなかを歩く彼らに樹木が話しかけてくる。「風はいつそう深い音を響かせた。風の声は弱まり、そして強まった。木々が話しかけた。木々の上を風は低く唸りながら通りすぎていった。大いなる沈黙の瞬間があったかと思うと、次には檜が話し、さらに柳が、そしてハンノキが話した。ポプラは馬の尻尾のように右や左でしゅうしゅう音を発したが、突如すべてのポプラは沈黙してしまった。その時、夜は沈黙の奥底でごく静かに呻いていた。」<sup>24</sup>こうして、彼らは北上し、ついにヴィルヴィエイユという村にたどり着く。

2人が探し出した「暦を売っている男」<sup>25</sup>の住まいから、蟄蛙たちの鳴き声が聞こえてくる。

野生の牧草やイラクサや葉のない無花果の生い茂った庭のあいだを、階段は続いていた。草が裂けた壁から溢れ出ていた。この秋最後の蟄蛙たちが瓦礫のなかで、ガラスをこすり合わせたような透明感のある鳴き声で歌っていた。明かりで照らされた家に、階段は大きな段をさらに2つ、波のように投げかけていた。荷馬車が通れるほど大きな丸いドアで区切られた戸口で、階段は消滅した。<sup>26</sup>



蟻蛙の鳴き声が聞こえてくるこの住居にはさまざまな秘密が詰めこまれていた。蟻蛙の鳴き声はやや不気味なことが待っていることを暗示する。その家から聞こえてきた「狂乱の調べ」<sup>27</sup>は、彼らが探しているマトウロの息子の恋人ジーナによるものだということが間もなく判明するが、息をひそめて隠れているジーナは、自由を憧れる気持を歌声に託している<sup>28</sup>。

アントニオとマトウロも鬱屈した気持を晴らすために、街に出かけ、居酒屋で飲み、酔いしれる。酒を注いでくれる少女のギターに合わせてアントニオは踊る。

彼〔アントニオ〕は両腕を真横に上げた。そして膝を曲げ、右足、そして左足を前進させ、さらに右足、そして左足を前進させた。1歩ごとに空中でそっとひざまずき、頭を前方にかしげた。両腕は開いていた。大きな靴が叫んでいた。1歩1歩、ギターの響きとテーブルの上で鳴る虚ろな音に合わせて、彼は少女の近くまで進み出た。そこで彼は身振りをほとんどせず足踏みをした。拍子にそっけなく合わせて小さく曲げられる膝、腕の振動、ほとんど振動しない手、熱く燃えている長い身体の柔らかなうねり。それは渦の中央に触れた流木のようなようだった。

ほとんど何も見えなかった。少女は自分の弾く音楽にすっかり熱中し、ギターの上にかがみこんでいた。彼女の輝かしい長い髪の毛と、男の正面の薄暗い弦の上で踊っている白い手、それ以外はもう何も見えなかった。<sup>29</sup>

クララから便りが届かないのに絶望しているアントニオは、狂ったように踊る。この直後、居酒屋に飛びこんできた隠れん坊の最中の少女にクララの幻影を見たアントニオは、マトウロを置き去りにしたまま、彼女を追って街に走り去っていく。その結果、ひとりで帰途についていたマトウロはモドリユの手下に殺害されることになってしまう。アントニオは死の舞踏を踊ったわけである。

このあと、モドリユの屋敷に火を放つことによって復讐を果たしたダニス（マトウロの息子）とアントニオはそれぞれジーナとクララを伴って、雪融け水で増水している河を筏で下る。明るいざわめきに満ちあふれた色鮮やかな春の光景は次のように描写されている。

南の春は森や河から立ちのぼってきていた。春はすでに夕べと夜を征服した。時間の長さを支配した。氷をまとった高山は北を切り裂いていた。雲の毛織物が山腹ではためいていた。しかし、もう寒さは感じられなかった。魚たちが飛び跳ねていた。雄の狐が悲しげな小さい声で呼びかけた。灰色のキジバトたちが太陽を背景に飛翔し、翼の先端が明るく照らされた。カワセミが水の上を滑空した。北に向かって矢のように発射された鶴たちが、鳴きながら通りすぎた。無数の鴨が葦の茂みを押しつぶした。豚のような背を見せて、チョウザメが水面を泳いでいた。太陽がその鱗に当たり、きらめいた。少量の泥が尻尾の揺れに付き添った。

こうして音と色彩と香りを満載した物語は完結する。ジオノが描きたかったのは「世界の歌」だったので、人間たちの活動にとどまることなく、世界から立ちのぼってくる多種多様の歌を描写することに最大の精力が注がれているのがよく理解できる物語である。事実、この『世界の歌』はきわめて多彩な音が読者にも聞こえてくるように書かれた類まれな作品なのである。

### 3. 『喜びは永遠に残る』における音楽

この物語では、南仏オート＝プロヴァンスの架空のグレモーヌ高原を舞台に 20 人ばかりの農民や羊飼いたちが登場する。文明から遠く離れているので、『世界の歌』と同様、いわゆるクラシックの音楽が話題になるようなことはない。しかし、さまざまな音楽的要素がちりばめられていることに変わりはない。

物産市に出かけたジュルダンが熱いワインを待っているあいだ、仲間たちの表情をそれとなく見つめていたが、彼らは例外なく疲れ切っており、その表情はじつに虚無的だということに気づく。「心が瀕死の状態」<sup>31</sup>に陥っているとジュルダンは考える。

その時、カフェの前を通りかかったアル中気味の女の孫が海外で癩病患者の治療にあたっていると聞き知る。他人のために献身的に尽くす人間の関係者が、意外にも身近なところにいるということを知ったジュルダンは、心のなかに光明が差しこんでくるような気分を味わう。その1条の光がフルートの音楽というたとえによって表現されている。同時にジュルダンは「喜びは残ることができる」という確信を抱くことができたのであった。この長篇物語の根幹がこの場面に凝縮されている。これ以降の物語のすべてがここから花開いていくのである。

先ほどから彼 [ジュルダン] にはフルートの調べが聞こえてくるような気がしていた。

夕闇がおりてきたとき、ジュルダンは自分の農場に戻ることにした。寒かったが、森を1周する長い道を辿った。歩く必要があったのだ。彼は自分がまるでダンスしながら歩いているように感じた。しかもフルートの調べがいよいよはつきりと聞こえてきたし、その調べがまるで雷鳴のように鋭く天空に轟きわたったり、またその調べが地上に下りてきて、丘の起伏と小川の蛇行を備えた広大な土地のように広がっていくこともあった。

「喜びは残ることができる」とジュルダンは思った。

「ただ、あの男がやって来なくては」とジュルダンは考えた。

マリオンの孫、海の向こうへ渡っていったあのマリオンの孫のことしか、もはやジュルダンは考えていなかった。いやそうではない。ジュルダンは別の男のことを考えていた。その男が誰なのか分からなかったが、それは確かに誰かであっ

た。病人を世話することができる手を持ち、救いようのない致命的な病気をも恐れられないだけの人々がいるということを知るだけで、ジュルダンには充分であった。

そういう人物がひとりやって来る。そのことがぜひ必要なのだ。青々と茂っている心を持った男がひとり。

そういう男がいるということを知るだけで、フルートの調べが聞こえ、希望が湧き、森を1周する長いまわり道でも歩いてみたくなるのである。<sup>32</sup>

それから間もない日の夜明けに、あまりにも素晴らしい夜の光景に感動したジュルダンは、そんな早朝こそ物産市で買ったばかりの新品の犁を使い始めるのにふさわしい時だと思い、ひとり黙々と畑を耕していた。そうすると、本当にひとりの男がジュルダンの前に現れた。煙草を一服したあと、畑に畝をつけていくジュルダンのかたわらをその男は歩いていく。そして口笛を吹く。その口笛はまるでフルートのような音色で高原に広がっていく（『ジャン・ル・ブルー』でジャン坊やがバッハのポロネーズを口笛で吹いたことを思い起こしておこう。このポロネーズは元来がフルート用に作られた作品である）。

男は犁の傍らを歩む。もう今では男はしゃべらない。男は口笛を吹く。新しい畝、火のような夜、広大な高原、そういうものすべてと調和した歌を男は口笛で吹く。唇をとがらせてそっと吹く。その歌は彼自身とジュルダンのために響いているようだった。まるで秘密のように。そしてすぐさまジュルダンは、それまで自分の頭のなかで鳴り響いていたあのフルートの音色をそこに聞き取った。そうしてその歌は広がり、すでに高原の上で息づき、馬もその歌を聞くことができた。

33

これ以降、希望の象徴とでも形容することができるこの口笛は、高原の津々浦々まで染み透っていくことになる。混じりけのない透明な音色はじつに力強く、大地の凹凸や邪魔物など物ともせず、あらゆる方向に向かって空気を貫いていく。

それから男はふたたび口笛を吹きはじめた。その土地の男たち、たくさんの森とたくさん湖とたくさんの山を見た男たち、大荒れの空を何度も見たことのある男たち、そういう男たちが作った諺が、事実、伝えられている。そういう体験をした男たちが、何事かを知っていたということは認めなければならない。悪いことから美しいことが出てくるはずがない、と言っている諺がある。

口笛はこのうえなく美しかった。

その口笛の響きはまん丸だった。それは静かに流れていった。まさに、行く必要のあるところに流れていった。その口笛は、堅固な頭脳から生まれでてきているのが感じられた。男の穏やかな2つの目が投げかける視線、ゆっくりした動作、広々としたグレモーヌ高原に足を止めたその男の、木のような背丈と緩慢さがそ

の口笛から連想された。その男はおそらく癩病人を看病したことはないのだろう。しかしそういう看護を宿命づけられている人々がいる。男に病気を見せさえすれば、看病したいという欲求が彼の内面から目ざめてくるのである。<sup>34</sup>

物語の核心がこうして見事に導入された。あとはこの口笛の音響がどのような過程をたどり高原の隅々まで浸透していくかということを描写していけばいいことになる。作者ジオノは、ジュルダンにボビを連れて高原を1周させることにする。それぞれの隣人たちの家庭でボビは奇跡的な行いを披露していく。本稿の目的からいささか外れてしまうので、ここではボビが見せた驚異的な行為を検討する余裕はない。

高原に喜びを定着させる手段を求めて、ボビはいったん高原を去っていく。何物かを持ち帰るためだということはジュルダンにも分かっている。ボビが出発して1か月経過したある夕べ、電報が届く。待ち合わせの場所へ指定の時刻に向かうジュルダンとマルトに風が語りかける。この描写は『ボミューニュの男』においてアルバンのハーモニカが喚起する光景を彷彿させるものがある。次の文章の「風」をハーモニカの音楽に置き換えて、すでに引用した『ボミューニュの男』の文章と比較対照していただきたい。

風は語っていた。それは他のすべてと同じくミルク状の風だった。その風は、様々の形をして、映像や微光や光線や炎で満ちあふれていた。そうした光は、地面は1センチたりとも照らしていなかったが、身体の内部にはくまなく明りを照らしていた。急流のなかの石ころのように、風は言葉を運んでいた。言葉が鳴り響くのが聞こえた。風は言った。「山、氷、樅の木のやに、水や葦。いつでも恋ができる鳥たちの巣などのあるウヴェーズ川の谷。高原の奥のアーモンドは花が咲いている。シェイユにある粘土採取場がふたたび動きはじめて、粘土はゆっくり谷間の方に流れている。俺はこの前、真新しい粘土の上を通りかかった。子狐が誕生したことだろう。あの時は8匹いたが、今では少なくとも倍になっているだろう。」<sup>35</sup>

雄鹿を伴ったボビが現れ、その鹿をジュルダンとマルトに紹介する。純粹で野生のものがいかに素晴らしいかということを、ボビはジュルダンたちに実物を見せて説明する。「2人とも見てくれ。純粹で野生のものがどれほど闇を照らすかを。この鹿が新芽と同じ色の目をしているのを見てほしい。野生の世界のなかで闇に包みこまれてしまうと、俺たちの目は何の役にも立たない。いろんな季節への喜びや素朴な優しさを俺たちは味わうことができなくなってしまっているから、俺たちの瞼の下には死んだ石しかない、こういうことを考えてほしい。この鹿の目の素晴らしい輝きをよく見てほしいんだ！」<sup>36</sup>ボビはこう言う。このとき「森はとても荘重な歌を歌っていた」<sup>37</sup>のであった。こうして、準備はすべて整えられた。

寂しかった高原に少しずつ色彩が点在するようになり、音や歌も聞こえるようになっていく。

今では太陽は休まずに昇っていた。

ボビがそこでしばらく眺めていると、ラッパの響きが聞こえた。7つか8つの長く嘎れた悲しい音だった。その音は高原の奥から響いてきた。

ボビは草原の霧の彼方を見ようとした。花咲いたアーモンドの木々の薔薇色の斑点しか見えなかった。

ラッパがまた鳴り響いた。最後の音は憂愁を帯びた音色だったので、空の下に力なく広がっている広い高原を思い起こさせた。

「始まりを告げ知らせるラッパだ」とボビは思った。<sup>38</sup>

誰がラッパを吹きならしているのかボビには知る由もなかったが、そのうちに、銅色のラッパが朝の光を受けて輝くのが見え、やがて吹いている男の姿も確認することができた。ボビはそれが高原に喜びが息づくための始まりの合図だと思えたのであった。

そしてまたラッパが鳴り響いた。

今度は朝霧のなかに銅色のラッパが輝くのを、ボビは見た。そのしばらくあと、野原を歩いている男の黒い姿を認めることができた。アーモンドの果樹園の縁を、その男は歩いていた。男は水仙の畑までやって来た。男はラッパを脇の下に抱えて花を眺めた。水仙を摘むために屈み込んだ。水仙を鼻に近づけた。香りを吸いこんだ。水仙の花を自分の顔に押し当てたまま長いあいだじっとしていた。ついで彼はラッパに口を当て、みんなに呼びかけるかのように、空の四方八方にラッパを向け、ゆるやかで悲しい曲を演奏した。そのあと、彼は農場の方に歩いた。ボビは、自分の姿を見られずに観察できるように、窓枠のうしろに身を隠した。<sup>39</sup>

このあと、何の申し合わせもしていないのに、高原の住人たちのほとんどすべてがジュルダンの農場に食料を持って駆けつけてきたので、即席の宴会がにぎやかにはじまった。女たちは家のなかでフリカッセを作り、男たちは子山羊と野兎を焚火の上で焼いた。にわか雨が降ってくるが、男たちがたじろぐことはない。

料理を作りながら女たちは歌う。この光景は『ジャン・ル・ブルー』におけるジャンの母親の仕事場の歌声を思わせるものがある。外で焼き肉を仕上げている男たちに、まずジョゼフィーヌの歌声が聞こえてきたあと、音楽の場面は次のように描写されている

ついに、女たちはみんな揃ってリフレーンの部分を歌った。

マルトは音程を3度離して歌い、エレヌ夫人はアルトで歌い、バルブは裏声を出し、オノリーヌは平板な声で歌った。そして、みんなよりはるか高い音程のオロールの声が、元気よく躍っていた。[中略]

「女たちが歌っているぜ」とジャクーは言った。

それは奇妙な出来事だった。<sup>40</sup>

高原の住人たちが集まり宴会を開くのははじめてのことだった。みんなで一緒に歌うなんてことはまったくなかった。それまで彼らはそれぞれ別々に暮らしていたのである。ときおり出会ったときに話しあうとしても、ワインのグラスを傾けながら親しく話し合うなどということとは無縁の暮らしをしていたのである。ワインの酔いも手伝い、彼らの周囲にはやがてまるで世界が鳴り響いているかと思えるほど、ありとあらゆる音響が身体の中かから鳴り響くようになる。

音はほとんどなかった。聞こえる音といえば、休憩地で鳴いているケラや吹きはじめた風の音くらいであった。

しかし、何にもまして聞こえてきたのは、血が太鼓のように鳴る音、血がとどろく音だった。男や女たちの体内で、血は内にこもった太鼓を叩いていた。その音はそれぞれ虚ろな胸を叩いているようだった。みんなは自分がその律動とつながっているのを感じた。小麦を打つ脱穀機の竿のようだった。穀竿が麦を打ち、宙に舞い、麦を打ち、宙に舞っているようだった。人間の苦悩が桶のなかに飛び込んでいくようだった。馬の規則的なギャロップのようだ、もしも馬がそのように規則的に大きな蹄のギャロップでいつまでも走り続けるのなら、その馬は世界の果てまで駆けていくだろう。そして世界の果てで、その馬は空のなかをギャロップで駆け抜けるだろう。そうすれば、今大地が鳴り響いているように、穹窿[天空]は馬のギャロップで鳴り響くだろう。いつまでも、いつまでも、途絶えることなく。というのも、血は脈打ち、打ち砕き、駆けることを止めないし、黒い太鼓を打ち鳴らして、みんながダンスに加わるよう誘うのを止めないからだ。<sup>41</sup>

この宴会のあと、高原の雰囲気明らかに変わっていく。喜びを共有することができた高原の住人たちは、それぞれ自分にできることを意欲的に実行するようになっていく。高原には羊の群れがふたたび舞い戻り（すべての羊を売り払ってしまい自堕落な暮らしをしていたランドゥレは、気力を取り戻し、全財産をはたいて500頭の羊を買ってきてふたたび羊飼いになった）、男たちが生け捕りにしてきた3頭の雌鹿が期待通り小鹿たちを産み、草原や畑には色とりどりの花々が咲きほこり、ジュルダンとボビが記憶を頼りにして丹精こめて作りあげた機織り機が規則的で軽快な音をたてる。女たちはよく歌を歌う。男たちはワインを飲む。解放された馬たちが自由な空間を駆けまわる。こうしてグレモヌ高原に生命がいきいきと躍動するようになった。

ジオノの物語のなかでは生命感の躍動と音楽（あるいは音）の高揚は互いに連動し

た現象と考えられているので、音楽がどのように扱われているかということを探っていけば、物語がどういう風に盛り上がり終息したりしていくのかということの概要を把握することが可能なのである。

#### 4. 結論

ジオノの小説の狙いは「世界の歌」を表現するというところにあるので、人間たちの歌だけでなく自然界の多彩な音響が物語のなかに取り入れられているということまで検証してきた。

『ジャン・ル・ブルー』では2人の音楽家が登場し、ジャン坊やが彼らに音楽のレッスンを受けるようになったので、当然のことながら音楽への言及はきわめて多彩であった。これは、周囲の住人たちの暮らしに救いの手を差し伸べていた父親のように、ジャンもまた、口笛で慰めを提供するだけにとどまらず、さまざまなことができるような人間に成長していくであろうと予想させるような物語であった。

『世界の歌』では主として自然界の音響が、物語の進行を側面から補足するような形で、おびただしい場面において描写されている。アントニオが詩人兼歌手なので、実際に歌が歌われたり、また居酒屋の場面では少女がつま弾くギターに合わせてアントニオは絶望のダンスを踊ることになったりした。終幕の春の場面では、巡ってきた春が柔らかな物音で2組の恋人たちを祝福していた。

『喜びは永遠に残る』でも、住人たちは陽気になると歌を歌う様子が紹介されるとともに、自然界の多種多様の音響が描写されていた。即席の宴会を告げるラッパが印象的であった。物語の最後の幕を引いたのは、「雷が、彼[ボビ]の両肩のあいだに金色の木を打ちこんだ」<sup>42</sup>と表現されている落雷の大音響であった。そして、詩人のボビはいなくなってしまうが、彼を愛するジョゼフィーヌのなかにボビの喜びが確実に伝えられていることが分かるように、作者ジオノは次のように書いている。

その夜、彼女[ジョゼフィーヌ]は苦しまなかった。彼女が世界からこんなに多くのものを受け取ったことは、それまで1度もなかった。あらゆるものが彼女を支えてくれているように感じられた。あらゆるものから彼女は力を与えられた。夜から、大気から、色彩から、香りから、森の唸りから。今ではボビが百ものやり方で自分と一緒にいるように彼女には思われた。それまで1度も感じたことのない何か確かなものが、そこにはあった。<sup>43</sup>

ジオノの作品において音楽（音響）がきわめて重要な役割を担っているということ、3つの長篇小説に沿って検討することができた。

もっと小規模の作品なら、例えば『蛇座』<sup>44</sup>において、エオリアン・ハーブ（木の枝に9本の弦を張ったリラのような楽器）、タンパン（8本の管をそなえている一種のフルート）、ガグレット（フルートのような大型の楽器で、木でできているものと陶器

のもの2種類がある)といった、ジオノ考案による独特の架空の楽器が奏でる音楽のなかで、海や河や風や樹木などの役割を演じる羊飼いたちがそれぞれ即興で台詞を弁じていくという演劇がマルフガス高原で繰り広げられる。まさに音楽による夏の夕べの祭典と言うことが可能な演劇空間の創造である。ジオノの面目躍如たるものがある。すべてが架空の物語であるということは心得ておく必要があるが、そのことは譲歩するとしても、ジオノの作品における音楽の重要な役割をここにも確認することができるのである。

---

## 注

<sup>1</sup> ジオノの「法螺吹き」の側面については以下を参照されたい。ジャン・ジオノ『木を植えた男』(山本省訳、彩流社、2006年)に付された「解説」のなかの「ジオノの執筆態度」の項(74-87頁)。

<sup>2</sup> *Entretiens avec Jean Carrière*, in Jean Carrière, *Jean Giono, Qui êtes-vous?*, La Manufacture, 1996, p.106. (訳文は拙訳を用いる。)

<sup>3</sup> *Ibidem*, pp.106-107.

<sup>4</sup> *Ibidem*, p.110.

<sup>5</sup> Jean Giono, *Entretiens avec Jean Amrouche et Taos Amrouche*, Gallimard, 1990, p.84. (訳文は拙訳を用いる。)

<sup>6</sup> Jean Giono, *Solitude de la pitié*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Pléiade, p.520. (訳文は拙訳を用いる。)

<sup>7</sup> Jean Giono, *Un de Baumugnes*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Pléiade, pp.285-286. (訳文は拙訳を用いる。)

<sup>8</sup> *Ibidem*, p.286.

<sup>9</sup> 山本省「友情の記念碑—『ボミューニユの男』論考—」、信州大学人文社会科学研究 第4号、2010年3月、2-18頁。

<sup>10</sup> Jean Giono, *Jean le Bleu*, Œuvres romanesques complètes, Tome 2, Pléiade, pp.34-35. (訳文は拙訳を用いる。)

<sup>11</sup> *Ibidem*, p.23.

<sup>12</sup> *Ibidem*, p.24.

<sup>13</sup> *Idem*.

<sup>14</sup> *Ibidem*, p.26.

<sup>15</sup> *Ibidem*, p.40.

<sup>16</sup> *Ibidem*, p.46.

<sup>17</sup> *Ibidem*, pp.50-51.

<sup>18</sup> ジャン・ジオノ『世界の歌』、山本省訳、河出書房新社、2005年、11-12頁。

<sup>19</sup> 同書、13頁。

<sup>20</sup> 同書、40-41頁。

<sup>21</sup> 同書、51頁。

<sup>22</sup> 同上。

<sup>23</sup> 同書、66頁。

<sup>24</sup> 同書、92頁。

<sup>25</sup> 同書、141頁。

<sup>26</sup> 同書、144頁。

<sup>27</sup> 同上。

<sup>28</sup> 同書、203頁参照。

<sup>29</sup> 同書、261頁。

<sup>30</sup> 同書、316-317頁。



---

<sup>31</sup> ジャン・ジオノ『喜びは永遠に残る』、山本省訳、河出書房新社、2001年、9頁。

<sup>32</sup> 同書、11頁。

<sup>33</sup> 同書、15－16頁。

<sup>34</sup> 同書、18頁。

<sup>35</sup> 同書、109頁。

<sup>36</sup> 同書、116頁。

<sup>37</sup> 同書、119頁。

<sup>38</sup> 同書、141－142頁。

<sup>39</sup> 同書、142－143頁。

<sup>40</sup> 同書、175－176頁。

<sup>41</sup> 同書、206頁。

<sup>42</sup> 同書、528頁。

<sup>43</sup> 同書、532頁。

<sup>44</sup> Jean Giono, *Le serpent d'étoiles*, Récits et essais, Pléiade, 1989, pp.65－144.

(信州大学 全学教育機構 教授)

2012年1月6日受理 2012年1月27日採録決定